八田一朗の「根性」論の独自性に関する一考察 ：1960年代の「根性」批判と「トレーニング」論の分析を通して

Ichiro Hatta's Distinct Perspective of "Konjo" Theory
: An analysis of his 1960's criticisms and "training"

長 島 和 幸 : Kazuyuki NAGASHIMA

福岡大学スポーツ科学部 : Faculty of Sport Science, Fukuoka University
8-19-1 Nanakuma, Jyonan-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka 814-0180, Japan

Abstract

The aim of this study is to establish Ichiro Hatta's "konjo" theory through analysis of his criticism of this trending term, "konjo", along with his "training" concept, both terms he used during the 1960s. The first analysis identifies Hatta's definition of "takeyari konjo" and "makeinu konjo" in his criticism. These definitions condemned training methods as "irrational". Athletes and coaches who were supposed to aim at winning, yet focused on cultivating just a "mental" side without accessing "authentic strength". Therefore Hatta defined any victories as mere coincidences. Hatta's concept of "konjo" was grounded in the importance of both the "physical strength and mental strength" components of athletic ability. The second analysis of this research clarifies Hatta's focus on consistent victory by targeting athletes' "physical strength and mental strength" under seven types of "training" provided in his coaching. In essence, this study finds Hatta's "konjo" theory was different from the popularized notion during the 1960s. We can characterize his perspective as being "physical strength and mental strength". As will be outlined, his theory was embodied in his coaching.

1. はじめに

1.1. 問題の所在と本研究の目的

2012（平成24）年の大阪市立桜宮高等学校における体罰事件^{注1）}を契機に、運動部活動における体罰や事故をめぐる議論が活発化してきた。ここでは、運動部活動のあり方を論じる際に度々「根性」という用語の使用が確認できる。例えば、大阪市立桜宮高等学校の暴力問題の解決策として運動部活動を専門的な指導者に任せることで「専門的な知識がないゆえの根性論による指導はなく

なる」（朝日新聞2013年2月23日付朝刊）という記事や、運動部活動で水分補給を禁止するような「非科学的（ひかがくてき）な根性論（こんじょうろん）がまかり通った時代もありました」（読売新聞2016年7月6日付朝刊）という記事がある。さらには、元プロ野球選手の桑田真澄氏へのインタビューに関する記事では、戦後のスポーツ指導の中で戦前の軍隊式の指導法が野球に取り込まれ「『水を飲んだらバテる』『根性がない』ということになり、それが戦後の野球指導にも持ち込ま

れた」(朝日新聞 2014 年 9 月 6 日付朝刊)が、今後は「スポーツ医学に基づく合理的な教え方をする指導者を増や」(朝日新聞 2014 年 9 月 6 日付朝刊)することが必要であると指摘されている。このように近年の運動部活動をめぐる議論においては、「根性」が非合理性と結びつけられ、否定的な意味で用いられていることがわかる。つまり、専門的な知識がなく精神的な面ばかりを強調する非合理的な「根性」論に基づく指導が昨今の運動部活動における体罰や事故の原因であると考えられている。

このように近年の運動部活動をめぐる問題の原因とされている「根性」は、外来文化としてのスポーツが日本に輸入され、変容していく過程を明らかにしてきた「日本的スポーツ論」^{注2)}研究において、「日本的スポーツ」の特徴を示す用語として注目されてきた。しかし管見の限り、スポーツにおける「根性」論の内実については以下の通り、十分に検討されてきたとはいえない。これまでの「根性」論研究を整理した岡部ほか(2012)は、「日本的スポーツ」を論じた文献において、「日本的スポーツ」の特徴として示されてきた「精神主義」(菅原, 1976, p.24)などと類似する概念^{注3)}として「根性」を取り上げ、1960年代における「根性」の意味使用の変容およびその要因や、スポーツにおける「根性」の成立および定着状況について実証的な分析を行っている。その結果、岡部ほか(2012)は、1964(昭和39)年に開催された第18回オリンピック競技大会(以下、東京大会と略す)を契機として、「根性」が人間性や人間の本質的な部分、先天的に備わった性質といった意味で、主に否定的な用語としての利用から、主に肯定的な文脈における使用へと転換していったことを実証的に明らかにしている。またこの取り組みの中で、岡部ほか(2012)は、東京大会を契機に取り上げられた「根性」の内実について検討し、「根性」が東京大会を背景に「競技者の精神的基調として養成・強化の対象とされ」(岡部ほか, 2012, p.140: 強調は筆者による)、また、「勝利という目標達成のために精神を集中し、困難に屈せず継続する強固な意志のこととされ、その養成には、ハードトレーニングといわれる猛練習が重視され」(岡部ほか, 2012, p.140: 強調

は筆者による)たことを指摘している^{注4)}。

このような岡部ほか(2012)の先駆的な研究と前述の近年の運動部活動をめぐる問題における「根性」に関する言説を比べると、「根性」の意味や評価が多様であることがわかる。すなわち、「精神」面に偏った「根性」が運動部活動をめぐる問題の原因として否定的に捉えられている前者に対して、後者は1960年代において「精神」面に偏った「根性」が肯定的な意味として用いられるようになったと指摘しているのである。そして、このような「根性」の意味や評価の多様性を踏まえると、そもそも岡部ほか(2012)の主張自体も1960年代の「根性」論の流行の片面的な理解の可能性が高いことが推察される。実際に、岡部ほか(2012)も、体育・スポーツの各方面における「根性」論の流行に関しては、「オリンピック選手を指導した指導者たちが独自の根性論を展開し、東京オリンピック以降の根性の流行を後押しした」(岡部ほか, 2012, p.137)と指摘している。しかしながら岡部ほか(2012)は、「独自の根性論」の存在を指摘しつつも、東京大会で女子バレーボールチームを率いた大松博文(1921-1978: 以下、大松と略す)のみの分析にとどまっている(岡部ほか, 2012, p.137)。

こうした「根性」論研究を批判的に検討した結果、「根性」論研究には、以下のような研究の課題が残されている。まず、大松以外の「指導者たち」が唱えた1960年代の「根性」論とはどのようなものであったのか。さらには、「指導者たち」が選手を指導する中で何を体現したのだろうか。こうした検討を行っていくことで、1960年代の「根性」論の総体が明らかになっていくと考えられる。

そのため本稿では、このような「日本的スポーツ論」としての「根性」論研究への問題意識を前提に東京大会で日本レスリングチームの総監督を務めた八田一郎(1906-1983: 以下、八田と略す)に着目し、1960年代の八田の「根性」論の独自性を明らかにする^{注5)}。

1.2. 八田一郎と「根性」論

まず、各種史・資料を用いて八田という人物の生涯の概略を確認しておきたい^{注6)}。八田は、1906

(明治39)年6月3日に江田島の海軍兵学校(広島県江田島市)で父重次郎と母ハルの間に長男として生まれた。八田は幼少期、呉、佐世保、横須賀、鎌倉といった軍港地およびその周辺において、軍人養成のためのエリート教育を受けながら育った。また八田が16歳の時、すなわち、1923(大正12)年1月に講道館へ入門し、柔道の稽古を始めた。1929(昭和4)年4月、早稲田大学政治経済学部へ入学すると同時に同大学柔道部へ入部し、柔道の研鑽を積んだ。八田は入学直後「日米親善と柔道普及」(「早稲田大学柔道部百年史」編集委員会編, 1997, p.227)を目的に実施された早稲田大学柔道部によるアメリカ遠征のメンバーに選出され、そこでWrestlingなる未知のスポーツに遭遇する。八田は、渡米先のシアトル大学でレスリング選手と他流試合を行い、大敗を喫したことでその強さを目の当たりにした(八田, 1979, pp.33-34)。八田は、この出来事を契機に「いままでレスリングを馬鹿にしていたが、これはたいへんなことだ。いまこそレスリングを研究しておかないと、将来の日本の柔道はひどい目にあうぞ」(八田, 1979, pp.34-35)と考えるようになる。以後、八田は「非難、中傷の嵐のなかで」(八田, 1979, p.41)、また時に周囲からの「迫害」(八田, 1964a, p.61)を受けながら外来スポーツとしてのレスリングをわが国で継続的に実践するようになった。1931(昭和6)年には早稲田大学レスリング部の創部、および1932(昭和7)年には国内競技連盟としての役割を果たしてきた大日本アマチュアレスリング協会^{注7)}(以下、日本レスリング協会と略す)の創設を先導した。また同時期にあたる、1932(昭和7)年2月1日、八田は「幹部候補生トシテ歩兵第一連隊ニ入隊」し同年11月30日、「現役満期」となり翌日、「予備役編入」した。1939(昭和14)年3月2日に「臨時招集ノ為ノ野砲兵第一連隊留守隊ニ応召」し「支那事変勤務ニ従事」するため中国へわたり、1942(昭和17)年1月31日の「召集解除」まで兵役を務めた(八田の軍歴に関する「履歴書」より)。八田は、当時勤務していた北支那開発株式会社内で、1945年8月15日の詔勅を聞き、その後、内地へ引き揚げたという。そして1946(昭和21)年から死没した1983(昭和58)年までの期間に第3

代目の日本レスリング協会会長を務め、1956(昭和31)年から1968(昭和43)年までの期間には国際レスリング連盟^{注8)}の副会長も歴任した。また、総監督として臨んだ東京大会では、わが国に5つの金メダルの獲得をもたらした。このような成果を残した八田は、「雑草主義とでもいうか、快活で、積極的で、しかも明確な闘争精神は、日本のジメジメした精神主義の中にはほんとうの精神主義を樹立するだろう」(檀一雄, 2015, p.93)や、「一般のファンにも、なにがなんでも勝たねばならぬ、という型と、無理することはないよ、という型とがある。どちらがいいかは、べつとして、ただ、ハッキリしているのは、レスリングの八田氏や、バレーの大松氏のようなスポーツの鬼がいない種目は、ぜったい強くならない、ということだ。」(菊村到, 2015, pp.313-314)というような評価を得た。このように、八田は、外来スポーツとしてのレスリングをわが国に導入し日本におけるレスリングの継続的な活動の始まりを創り上げ、生涯をかけてその展開に関して中心的な役割を担った人物と評されている(財団法人日本レスリング協会80年史編纂委員会編, 2012, pp.32-198; 公益財団法人日本体育協会・公益財団法人日本オリンピック委員会, 2012, pp.76-79)。

そして、このように日本に外来文化としてのレスリングを導入した八田こそ、1960年代に「独自の根性論」を唱えた「指導者たち」のひとりといえるだろう。というのも、八田は「わたしがこれまでに述べてきた、選手鍛錬の方法は、みな根性をたたきあげる要素となっている」(八田, 1964a, p.132)と述べるほど、「根性」を重視していた。その一方で、本論で詳述するが、岡部ほか(2012)が検討した東京大会後の「根性」の流行に対して批判的な見解を示していたからである。そこで本稿では、まず、1960年代に流行した「根性」論の八田による批判の内実を検討した上で、八田の考えた「根性」の内実を逆説的に明らかにする。次に、明らかにされた八田の「根性」の内実を踏まえて、八田の課した「ハードトレーニング」を対象に検証する。以上の分析を通し、最後に、「精神」面に偏った「根性」とは異なった、八田の「根性」論の独自性を導出する。そして、このような取り組みは、小野瀬(2001)が

「日本のスポーツ観」をめぐる議論において不足していると指摘する「スポーツ観の同時代的差異」^{注9)}(小野瀬, 2001, p.61)を明らかにすることにつながるという点において意義を有すると考える。

1.3. 分析資料について

本稿は、1960年代の八田の「根性」論の独自性を明らかにすることを目的とする。そのため、本稿では、1960年代に八田によって上梓された『わが道を行く』(1964a)、『剃るぞ!』(1965a)、『勝負根性』(1965b)を主な資料として、八田の1960年代の「根性」批判と「根性」養成のための「トレーニング」論に関する記述の分析を通して、八田の「根性」論の独自性を考察する^{注10)}。

2. 八田一郎による1960年代の「根性」批判

本章では、八田が1960年代に流行した「根性」に対して展開した批判の内実を検討した上で、八田の考えた「根性」の内実を逆説的に明らかにしていく。八田は、「根性」の流行、さらには「根性」を基にした「ハード・トレーニング」(八田, 1964a, p.136)の流行に対して、次のように述べている。

根性といい、ハード・トレーニングといい、レスリングでわたしたちがいいだしたものの、やりだしたものである。そういう言葉が、はやりだしたものである。なんだか、レスリングがやっているのを、全スポーツ界がまねしているようである。(八田, 1964a, p.142)

つまり、八田にとって1960年代の「根性」の流行と、それを基にした「ハード・トレーニング」は、自分がやってきたことの「まね」のように映っていた。しかし同時に八田は、実際に用いられている「根性」の意味、さらには「根性」を基にした「ハード・トレーニング」は、「私たちが唱えた“根性”とは正反対のもの」(八田, 1964a, p.139)であり、「世間では、しかも、スポーツ界でも、間違った意味での根性が横行している」(八田, 1964a, p.134)と理解していた。そして、八田はこのような「根性」の「間違った意味」を「竹

やり根性」(八田, 1964a, p.134)と「負け犬根性」(八田, 1964a, p.134)という言葉を用いて批判した。そこで、まず、これらの八田の「根性」批判の意味の検討、つまり「竹やり根性」と「負け犬根性」の意味の分析を通して、八田が批判した「間違った意味での根性」の内実を明らかにしたい。

2.1. 「竹やり根性」批判

東京大会を回顧する中で八田は、「正しい技術の練磨とその実力の苦しい鍛錬を忘れて、精神力だけに、万一の優勝を期待していたようなところが、日本のスポーツ界にはなかっただろうか」(八田, 1964a, p.135)と、それまでの日本のスポーツ強化政策を批判的に問う。ここでいう「精神力」に頼った日本のスポーツ界の姿勢に対する批判こそ、八田の1つ目の「根性」批判である「竹やり根性」批判であった。八田は、前述したような自らの戦争経験を回顧し「竹やり根性」について、次のように述べている。

一つは“竹やり根性”である。戦争中にやかましくいわれたやつだ。日本人全部の一億総決起とかいって、老人に竹やりを振らせ、妊産婦にまでバケツ・リレーをさせたりした、あれである。…(中略)…それでは、外国の力には勝てない。いくら竹やりをふり回しても、たこ壺を掘り回しても、大東亜戦争には勝てなかったのだ。(八田, 1964a, pp.134-135)

八田は上述のように、一般人に対して「竹やりを振らせ」、「バケツ・リレー」を強要し、「たこ壺」を掘らせるような「大東亜戦争」における日本軍の体制を批判したのである。さらに八田は、次のようにも述べている。

戦争中、日本がアメリカのB29に対し、竹やりで勝てなかったあれだ。竹やりはバカバカしい、などといいながら、現在でも世間には竹やりのような非合理的なものがいかに多いことか。そういうヤツは困るのだ。(八田, 1965a, p.107)

つまり、八田は戦時中に爆撃機 B29 に対し竹やりで応戦しようとした日本軍の戦術を「非合理的なもの」として捉え、批判していることがわかるだろう。さらに、八田は、このような「大東亜戦争」における日本軍に対する批判と、自らが行った柔道およびレスリングの経験を関連づけながら、以下のように指摘している。

何度も、投げられ、抑え込まれながら新しい技術を工夫しなければならない。激しい練習の中に、勝つ工夫を見出さなければならない。それは、無理をしてやるわけではないのだ。合理的に考えて解決していくのである。レスリングの場合でも、柔道の場合でも、ただ猪突的に、力まかせにやるのではなく、科学的な力の配合を工夫して勝つのである。無理をしたら、効果がないし、それを精神力だけでがむしゃらにやれば、けがをして一生レスリングのできない身体になるくらいが落ちである。無理をするのは、“竹やり根性” 恰好ばかりは、掛声ばかりは、まことに強そうだが。(八田, 1964a, pp.138-139; 強調は筆者による)

このように、八田は、「掛声ばかり」で「恰好ばかり」は「まことに強そうだが」、ただ「精神力だけでがむしゃらに」、かつ「猪突的に、力まかせ」で「無理をする」ことを「竹やり根性」と表現し、その「合理的」でない点を批判したのである。

ここから、「竹やり根性」批判とは、八田が自らの戦争体験とそれまでの日本のスポーツ強化政策や自らの柔道およびレスリングの経験を関連づけながら、勝利するために必要な技術や体力を身につけず、また対戦相手を分析し戦術戦略をたてずに、「精神力」だけで戦おうとする姿勢や態度を「合理的」ではないと捉え批判したものだといえるだろう。

2.2. 「負け犬根性」批判

また八田は、東京大会を回顧する中で、特にレスリング競技に出場した重量級の選手や陸上競技および水泳競技の指導者たちに対して、「負け犬根性」があったと批判を行っている。

まず、八田は、レスリング競技フリースタイル 97kg 級代表として出場し 3 回戦で敗退した選手に対して「模範的な自衛隊員」(八田, 1964a, p.113) のようである、と揶揄した。それは、当該選手が「『力が違いすぎて』といいわけを」(八田, 1964a, p.113) し、また、対戦相手と比べ「『どうも力が違うから』と、頭からきめてかかっている」(八田, 1964a, p.135)、「まったく攻撃をしなかった」(八田, 1964a, p.113) からである。このように八田は、選手による「『どうせやっても俺は負けるからダメだ』という弱虫の考え方」(八田, 1965a, p.25)、すなわち、試合に臨む前から諦めている「精神」やその「精神」から生じる態度に対して、「負け犬根性」と批判したのである。

次に八田は、このような「負け犬根性」の具体例として、東京大会に向けた陸上競技および水泳競技の指導者たちの指導を挙げ、彼らは「選手のコンドーションというものを非常に大事に」(八田, 1965b, p.44) する一方で「まるでトレーニングをやらない」(八田, 1964a, p.172) と指摘する。このような指導の様子が、八田には、まるで選手たちを「はれものにさわるみたいになっている」(八田, 1965b, p.48) かのように映っており、以下のようにも批判している。

技術を磨いて、真の実力をつくりだすことをせずに、ちょっと早い者、力のある者の万一の勝利を期待する。最初から負けることを予想しながら、万一を頼んでいたずらに精神力をたたき込もうとする。たまたまのフロックで出した記録をもって、その選手を英雄視して、日の丸を期待する。これも“負け犬根性”である。日本の、陸上や水泳にこれがなかったらどうか。(八田, 1964a, pp.135-136)

つまり八田は、陸上競技および水泳競技の指導者たちが勝利するために必要な「真の実力」を選手たちに養成せず、「万一」の勝利を期待し「いたずらに精神力をたたき込もうと」している点を批判したのである。ここから、八田の二つ目の「根性」批判である「負け犬根性」批判とは、八田が東京大会で敗北を喫したレスリング競技の

「重い方の連中」や陸上競技および水泳競技の指導者たちによる指導に対して、「真の実力」を養成せずに「万一を頼んでいたずらに精神力をたたき込もう」と「ただヤミ雲にやっておった」ことを批判したものといえるだろう。

2.3. 八田一朗の正しい意味での「根性」

ここまで、八田による「間違った意味での根性」の内実を明らかにするために、「竹やり根性」批判と「負け犬根性」批判の要点を明らかにした。まず、「竹やり根性」批判とは、選手が勝利するために必要な技術や体力を身につけず、また対戦相手を分析し戦術戦略をたてることもなく、「精神力」だけで戦おうとする姿勢や態度を「合理的」でないと批判したものであることが明らかになった。次に、「負け犬根性」批判とは、東京大会で敗北を喫したレスリング競技の重量級の選手や陸上競技および水泳競技の指導者たちが「真の実力」を養成しなかったことへ批判したものであることが明らかになった。これらのことから、八田による当時流行した「根性」に対する批判とは、勝利を目指すことを前提としていたはずの選手や指導者たちが、「真の実力」をつけて確実な勝利を目指さずに、「精神」面ばかりを強調して「万一」の勝利を目指していることが「合理的」でない点に対する批判であることが明らかになった。ここから、八田の考える正しい「根性」を有していることとは、「真の実力」を付けて確実な勝利を得られる状態を示していることがわかるだろう。では、八田が考えた確実な勝利を得るために必要な「真の実力」とは何であろうか。八田は確実に「勝つための条件」(八田, 1965b, p.9)を説明する文脈において「勝負強さ」(八田, 1965b, p.44)を挙げ、その重要性を、次のように指摘している。

最悪の条件におかれたときでも、それまで養いつちかってきた実力を発揮できる肉体の力と精神力、これが大事なのだ(八田, 1965b, p.48: 強調は筆者による)

ここから「真の実力」とは、「肉体の力と精神力」の両方を有することと考えられる。さらに、前述の通り、八田が1960年代の「根性」批判の中で、

「精神力」だけで戦おうとする姿勢や態度に対し「合理的」でないと批判をしていることを踏まえると、八田は「肉体の力と精神力」の両方を鍛えることを「合理的」であると評価していたことがわかる。これらのことから、八田が考えた正しい意味での「根性」とは、「肉体の力と精神力」を有している状態であると推察される。

3. 八田一朗による「ハード・トレーニング」の意図

本章では、前章で仮説的に明らかになった八田の「根性」の意味をより実証的に明らかにするために、八田が「根性」を醸成するために展開した「ハード・トレーニング」に着目し、個々の「ハード・トレーニング」において八田が「肉体の力と精神力」の両面の育成を意図していたことを検証する。「ハード・トレーニング」に着目する理由は、八田が自らの指導について「真の実力を養うためにいろいろ考えを出して、それに適合した最上と思われる方法を実行してきた」(八田, 1965b, p.48)と述べているからである。そこで以下では、八田が選手たちに課した個々の「ハード・トレーニング」の意図を「肉体の力と精神力」という観点から分析を行う。なお、本章の分析対象とした「ハード・トレーニング」は、表1の通りである。

表1 八田による「ハード・トレーニング」の一覧

「トレーニング」の名称	資料における記述箇所
ライオンとにらめっこ	八田, 1965a, pp.79-82. 八田, 1965b, pp.34-42.
逆インターバル・トレーニング	八田, 1964a, pp.142-145. 八田, 1965a, pp.122-123.
目かくしの練習	八田, 1965a, pp.124-125. 八田, 1965b, pp.15-19.
左右平均論	八田, 1964a, pp.132-134. 八田, 1965a, pp.157-158. 八田, 1965b, pp.23-26.
重量とスピード	八田, 1964a, pp.181-183.
反復練習	八田, 1964a, pp.140-142.
寒中水泳	八田, 1964a, pp.117-120. 八田, 1965a, pp.66-67. 八田, 1965b, pp.146-147.

3.1. 「ライオンとにらめっこ」の意図

八田は、1960年のローマオリンピックの開催を目前に、実施した強化合宿で先ず、「選手七、八十人を朝四時ごろたたき起こして上野動物園までカケ足させた。そしてライオンのオリの前に立たせた」（八田、1965a, p.80）。その上で最後に、ライオンを「にらませた」（読売新聞、1960年7月27日付、夕刊）。

図1 「ライオンとにらめっこ」の様子
（読売新聞、1960年7月27日付：写真は記事より筆者が抜粋）

八田はこの「トレーニング」を課した理由について、ライオンの有する「危険距離」^{注11)}（八田、1965b, p.36）を習得することでレスリングの試合中、「危険だと悟った時には直ちに対応できるだけの姿勢と心構えを維持しながら休む」（八田、1965a, p.81）ことができるようになるという。すなわち、「ライオンとにらめっこ」とは、八田が、この「トレーニング」の実践を通じ選手たちが試合中に休みながらも「直ちに対応できる姿勢」を身に付けるといふ「肉体」的メリットに加え、休みながらも「直ちに対応できる心構え」を身に付けるといふ「精神」的メリットを得られると考えた結果、選手たちを「オリの前に立たせ」ライオンを「にらませた」ものといえるだろう。

3.2. 「逆インターバル・トレーニング」^{注12)}の意図

八田は、日常的に選手たちに対しランニングの「トレーニング」の実施を命じており、その一環として「スピードを自由に変えるやり方」（八

田、1965a, p.122）で選手を走らせた。具体的には、選手たちを「フルスピードで、ハーフスピードで走らせ、調子を崩し息をあげさせ」（八田、1965a, p.122）るというものである。八田は、この「トレーニング」を課した理由について、選手たちが「よりいっそうのスタミナをつける」（八田、1965a, p.122）からだという。また八田は「試合にのぞんでものおじしな気持ち、つまり、耐久力をつける」（八田、1965a, p.121）ことができることも述べる。すなわち、「逆インターバル・トレーニング」とは、八田が、この「トレーニング」の実践を通じて選手たちが「よりいっそうのスタミナをつける」といふ「肉体」的メリットに加え、「耐久力をつける」といふ「精神」的メリットを得られると考えた結果、「スピードを自由に変えるやり方」で選手たちを走らせたものといえるだろう。

3.3. 「目かくしの練習」の意図

八田は、アメリカ遠征で出会った、ある盲目のレスリング選手について回顧し彼の「肉体」的な能力の高さについて述べた後、選手たちに自らの両眼を布で覆わせ、「目かくし」（八田、1965a, p.125）をした状態でレスリングをさせた。

図2 「目かくしの練習」の様子
（報知新聞、1964年8月13日付：写真は記事より筆者が抜粋）

八田は、この「トレーニング」を課した理由について、「相手の動きを早く感じとり反射的に動くことができる」（八田、1965b, pp.16-17）とい

う。また、八田は、試合中に相手の指や汗が自らの眼の中に入り、視界が閉ざされたとしても困らないようになるとも述べる（八田, 1965a, p.125）。すなわち、「目かくしの練習」とは、八田が、この「トレーニング」の実践を通じ選手たちが「相手の動きを早く感じとり反射的に動くことができる」という「肉体」的メリットに加え、試合中に視界が閉ざされたとしても困らないようになるという「精神」的メリットを得られると考えた結果、選手たちに「目かくし」の状態でレスリングをさせたものといえるだろう。

3.4. 「左右平均論」^{注13)}の意図

八田は練習中、選手たちに対し「左右平均にわざの修得、左右平均にやれということをやかましくない」（八田, 1964a, p.133）い、「むりに新しいわざを覚えなくて、いまもっているわざを、左右平均に」（八田, 1965b, p.23）仕掛けるよう命じた。八田は、この「トレーニング」を課した理由について、特に攻撃場面において少なくとも力は倍になり、場合によってはそれ以上の威力が発揮されるという（八田, 1965b, p.23）。また、八田は防御の場面において苦手意識が消えるとも述べる（八田, 1965a, p.157）^{注14)}。すなわち、「左右平均論」とは、八田が、この「トレーニング」の実践を通じて選手たちが攻撃力を向上させるという「肉体」的メリットに加え、防御の場面において自らの苦手意識を消滅させるという「精神」的メリットを得られると考えた結果、選手たちに「左右平均」に技を習得させたものといえるだろう。

3.5. 「重量とスピード」の意図

八田は練習中、選手たちに対し「スピードということをや非常にやかましくない」（八田, 1964a, p.182）い、練習相手に対しより速いスピードで攻撃を仕掛けるよう命じた。八田は、この「トレーニング」を課した理由について、「スピードが倍あればその力は倍となる」（八田, 1964a, p.181）からだという。また、八田は「スピードが速いほど衝突したときの力は恐ろしい」（八田, 1964a, p.181）とも述べる^{注15)}。すなわち、「重量とスピード」とは、八田が、この「トレーニング」の実践を通じ選手たちの攻撃「力は倍となる」という「肉

体」的メリットに加え、対戦相手に「恐ろしい」と思わせるという「精神」的メリットを得られると考えた結果、選手たちにより「スピード」のある攻撃を仕掛けさせたものといえるだろう。

3.6. 「反復練習」の意図

八田は選手たちに対し「どんなスポーツでも反復練習は、基本的トレーニングとして必要なもの」（八田, 1964a, p.142）であるといい、練習中に同じ動作を繰り返し行うよう命じた。八田は、この「トレーニング」を課した理由について、無意識に技を仕掛けられるようになるからだという（八田, 1964a, p.140）。また「やればできるのだ」という気持ちが、自然にできて、どこかに裏づけられ」（八田, 1964a, p.140）ていくとも述べる。すなわち、「反復練習」とは、八田が、この「トレーニング」の実践を通じて選手たちが「無意識に技を仕掛けられるようになる」という「肉体」的メリットに加え、「やればできるのだ」という自信を養成するという「精神」的メリットを得られると考えた結果、選手たちに同じ動作を繰り返し行わせたものといえるだろう。

3.7. 「寒中水泳」の意図

八田は日本代表の選手を強化するため、「毎年、冬に合宿することにして」（八田, 1964a, p.117）おり、その期間中に選手たちを「二分間ぐらい海に入らせ、水のかけっこをやらせ、あるいは水中騎馬戦というか、落しっこを水中でやらせた」（八田, 1964a, p.119）。八田は、この「トレーニング」を課した理由について、「風邪をひかない」（八田, 1964a, p.119）ようになるからだという。また、八田は「オレでもあんなことがやればできるという自信を植えつけること」（八田, 1965a, pp. 66-67）になるとも述べる^{注16)}。すなわち、「寒中水泳」とは、八田が、この「トレーニング」の実践を通じ選手たちが「風邪をひかない」というという「肉体」的メリットに加え、「やればできるという自信」を養成するという「精神」的メリットを得られると考えた結果、冬季合宿中、選手たちを海に入らせ約2分間、「水のかけっこ」「水中騎馬戦」「落しっこ」をさせたものといえるだろう。

表2 八田の「ハード・トレーニング」における「肉体」的メリットおよび「精神」的メリット

「トレーニング」の名称と内容	「肉体」的メリット	「精神」的メリット
●ライオンとにらめっこ 選手たちを上野動物園にいるライオンの檻の前に立たせ、ライオンを睨ませた。	選手たちが試合中に休みながらも「直ちに対応できる姿勢」(八田, 1965a, p.81)を身に付ける。	選手たちが試合中に休みながらも「直ちに対応できる心構え」(八田, 1965a, p.81)を身に付ける。
●逆インターバル・トレーニング 「スピードを自由に変えるやり方」(八田, 1965a, p.122)で選手たちを走らせた。	選手たちが「よりいっそうのスタミナをつける」(八田, 1965a, p.122)。	選手たちが「耐久力をつける」(八田, 1965a, p.121)。
●目かくしの練習 選手たちに「目かくし」(八田, 1965a, p.125)の状態でレスリングをさせた。	選手たちが「相手の動きを早く感じとり反射的に動くかんができる」(八田, 1965b, pp.16-17)。	試合中に視界が閉ざされたとしても選手たちが困らないようになる。
●左右平均論 選手たちに、「左右平均」に技を習得させた。	選手たちの攻撃力を向上させる。	防御の場面において選手自らの苦手意識を消滅させる。
●重量とスピード 選手たちに、より速いスピードで攻撃を仕掛けさせた。	選手たちの攻撃「力は倍となる」(八田, 1964a, p.181)。	対戦相手に「恐ろしい」(八田, 1964a, p.181)と思わせる。
●反復練習 選手たちに同じ動作を繰り返し行わせた。	選手たちが無意識に技を仕掛けられるようになる(八田, 1964a, p.140)。	選手たちが「やればできるのだという」(八田, 1964a, p.140)自信を養成する。
●寒中水泳 冬季合宿中、選手たちを「二分間ぐらい海に入らせ、水のかけっこをやらせ、あるいは水中騎馬戦というか、落っこを水中でやらせた。」(八田, 1964a, p.119)	選手たちが「風邪をひかない」(八田, 1965a, pp.66-67)ようになる。	選手たちが「やればできるという自信」(八田, 1965a, pp.66-67)を養成する。

3.8. まとめ

本章では、レスリング指導者としての八田が「真の実力を養うために」選手たちに課した「ハード・トレーニング」の意図を「肉体の力と精神力」という観点から分析を行なった。すなわち、八田は、選手たちが「トレーニング」を実践することでどのような「肉体」的メリットと「精神」的メリットを得られると考えたのかを検討した。結果は表2の通りである。

つまり、八田の「ハード・トレーニング」とは、実践する選手たちが「肉体」的メリットおよび「精神」的メリットを偏りなく享受できるという八田の考えから導き出されたものであることが明らかになった。このことは、前章で仮説的に示した通り、八田の「根性」が「肉体の力と精神力」を有する状態を意味することを示唆している。

4. 結論

本稿では、1960年代の八田の「根性」論の独自性を明らかにすることを目的とした。

まず、1960年代の八田による「根性」批判は、「竹やり根性」および「負け犬根性」への批判で構成されていることを明らかにした。次に、それぞれの批判の内実を検討した結果、八田の「根性」批判とは、勝利を目指すことを前提としていたはずの選手や指導者たちが、「真の実力」をつけて確実な勝利を目指さずに「精神」面ばかりを強調し、「万一」の勝利を目指していることが「合理的」でない点に対する批判であると考えられた。さらに、「真の実力」の内実について検討すると、「真の実力」とは「肉体の力と精神力」であると考えられた。これらを踏まえ、八田が考えた正しい意味での「根性」とは、「肉体の力と精神力」を有している状態であると推察された。その上で、

八田が選手たちに課した「ハード・トレーニング」を対象に「肉体の力と精神力」の向上という観点から検証した結果、八田が「肉体の力と精神力」の両面の育成を意図していたことが確認された。

以上のことから、1960年代の八田の「根性」論には、「精神」的な要素と「肉体」的な要素が偏りなく存在していたと考えられる。また1960年代の八田の「根性」論は、「精神」面に偏った「根性」論とは、異質であったといえるだろう。さらに八田の「独自の根性論」は、八田が指導において実践していった「ハード・トレーニング」に具現化されていたともいえるだろう^{注17)}。

以上のように、本稿での分析および検討、考察を通じ、1960年代の八田の「根性」論の独自性が明らかになった。すなわち、1960年代の八田の「根性」論には、「精神」的な要素と「肉体」的な要素が偏りなく、存在していたということである。しかし、八田は「根性」を醸成するためには、「トレーニング」場面のみならず「平生の生活、日常の動作も大切だ」（八田、1965a, p.79）と、日常生活における「動作」の重要性を指摘している^{注18)}。そのため、八田が選手たちに対し日常生活の場面で具体的にどのような実践を課したのか、あるいは、これらを「肉体の力と精神力」の両面の向上、という観点から検証していく必要があるだろう。また、八田は自らの「根性」論の独自性である「肉体の力と精神力」の向上の必要性を、どのような過程で重視するようになったのか、あるいは、1960年代以降、このような八田の「独自の根性論」は変容せずに持続していったのかという点も八田の「根性」論研究として重要な課題といえよう。さらには、「根性」研究としては、「同時代」に「根性」論を唱えた八田以外の「指導者たち」に着目し、それぞれの「独自の根性論」の内実を明らかにするとともに、「同時代」に流行した「独自の根性論」が、互いにどのような関わりを持ったのかもまた、検討していく必要があるだろう。

注

- 1) 2012（平成24）年12月23日、大阪市立桜宮高等学校バスケットボール部に所属する男子生徒が、所属するバスケットボール部で顧問

の男性教諭から頬を平手打ちされるなどの体罰を受けていたことを理由に自宅で自死した事件のことを指す。この事件を受けて、2013（平成25）年4月25日、日本体育協会（当時）、日本オリンピック委員会、日本障害者スポーツ協会、全国高等学校体育連盟および日本中学校体育連盟の5団体は「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」を公表した。同年5月27日には、文部科学省による「運動部活動での指導のガイドライン」が公表された。上述の「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」に対しては「統括団体としての責任や反省についてあまりにも不十分」（森川、2013, p.6）という批判がある一方で、「国の指針に先んじて、民間スポーツ組織が自主的に、スポーツにおける暴力の問題に対して、これを根絶する宣言を出した」（菊、2017, p.121）との評価もある。いずれにせよ、この事件がスポーツにおける体罰や暴力の問題について社会全体で議論する契機となった。

- 2) 三本松（2003）は、「スポーツの発展過程において、その国の風土、文化、国民性等が浸透していくことによって、その国独自のスポーツに対する価値観や意識、態度等が形成されるという文脈において、究極的には、わが国に特有の、あるいは固有のスポーツ観あるいはスポーツ行動様式等を明らかにする」（三本松、2003, p.52）という目的において、『日本人のスポーツ観』や『スポーツの日本の特性』を『日本のスポーツ論』に統一して用い」（三本松、2003, p.52）ている。
- 3) 岡部ほか（2012）は、他にも「修養主義」（岸野、1968, p.15；菅原、1976, p.24）、「苦しみのスポーツ価値意識」（上杉、1982, p.40）、「『苦行的』なスポーツ」（デビットノッター、2001, p.13）を挙げている。
- 4) 岡部ほか（2012）の研究は、松田（1971）・中込（1984）・山岸（1979）・山岸ほか（1979）・坂上（2001）による「根性」論に関する先行研究を踏まえて行なわれたものであり、「根性」論研究としては先端的な研究といえるだろう。本稿では、この関連から八田の「根性」批判を手掛かりに、八田の唱えた「根性」論の実

態を明らかにしていく。

- 5) ここでいう八田の「根性」論とは、八田の言説に着目し一つの論理としてまとめたものを指す。本稿では、八田という特定の人物における「根性」論を明らかにした上で、冒頭で述べたわが国における運動部活動の今日的課題に対して若干の考察を加えたい。
- 6) 八田の生涯を概略するために用いた史・資料は、八田の上梓した著書（八田, 1964a; 八田, 1965a; 八田, 1965b; 八田, 1979）における自伝的記述や、八田の戸籍に関する記録の写し、「早稲田大学在籍確認調査報告書」の写し、「講道館入門誓文帳」および「講道館昇段データ」の写し、八田の軍歴に関する「履歴書」の写しである。これらの内、八田の著書以外の一次史料は、筆者が八田の二男である八田忠朗氏が所持しているものを閲覧の上、写した。なお、史料の文字における旧字体は新字体に改めた。また、『呉市制 100 周年記念版 呉の歴史』（呉市史編纂委員会, 2002）、『早稲田大学レスリング部 70 年史』（早稲田大学レスリング部 70 年史編集委員会, 2001）、『財団法人日本レスリング協会 80 年史』（財団法人日本レスリング協会 80 年史編纂委員会, 2012）も用いた。
- 7) 大日本アマチュアレスリング協会は以後、法人格の名称の変更を除き、戦後に日本アマチュアレスリング協会へ、また 1995（平成 7）年には、日本レスリング協会へと改称した。
- 8) Fédération internationale des luttes associées (FILA) を指す。FILA は、2014（平成 26）年 9 月、United World Wrestling (UWW, 世界レスリング連合) へ改称した。
- 9) 小野瀬 (2001) は、昭和初期におけるスポーツの捉え方の差異に基づく論争に着目し、「日本のスポーツ観」という通説を批判的に検討する文脈において、「日本のスポーツ観」を捉らえる上での問題点を以下のように説明している。すなわち、「日本のスポーツ観」とは、「日本人のスポーツ観に見られる均質的部分のことを指す」（小野瀬, 2001, p.61）ものであるが、「日本のスポーツ観」を捉えようとする際、「ときにそれは全体と混同さ

れている」（小野瀬, 2001, p.61）のだという。また、この理由について、「均質的部分の前提となる異質的部分がはっきり示されていないからであろう」（小野瀬, 2001, p.61）とも述べている。その上で「スポーツ観の同時代的差異や歴史的変化といった異質性に対する視点は、日本的スポーツ観研究に最も欠けるものである」（小野瀬, 2001, p.61）と指摘している。これらの指摘を踏まえると、「独自の根性論」として、八田の「根性」論に着目する本研究は、「根性」論の「異質的部分」を明らかにする点において意義を有するものと考えられるだろう。

- 10) これらの著書の他に、1953（昭和 28）年に初版として発行し 1960 年代に、重版として発行された『レスリング』（八田, 1961; 八田, 1964b; 八田, 1966）が挙げられる。これらの重版では、適宜、各種規約を一新するとともに、内容に若干の訂正が八田により加えられていった。本著書には、レスリングの競技記録の掲載をはじめ、レスリングのルールおよび技術の紹介、説明が記述されている。また僅少ではあるが、レスリングの「トレーニング」法が紹介されている。しかし「トレーニング」法に関する記述は、「トレーニング」の仕方の説明にとどまっており、「トレーニング」論の内実を分析するには足りないものである。以上のことから、本著書は本稿における分析の対象外とした。
- 11) 「危険距離」とは、敵対する相手との距離と、失点リスクの相関における危険の限界地点を指す（八田, 1965a, pp.80-81）。
- 12) インターバル・トレーニングは今日、一般的に、スピードを持続する能力の向上を目的に高負荷と低負荷を交互に繰り返す、科学に裏付けされた練習法と認識されている（山地, 2015, p.312）。この「トレーニング」は 1960 年代にわが国のスポーツ界で流行するが、八田はこの流行に対し「わたしたちのところでは、そうはっきり名称をつけてはいなかったが、とっくの昔からやっていた」（八田, 1964a, p.143）と、その流行に対し批判的な見解を述べている。また同時に八田は、この「トレーニング」

を「逆インターバル・トレーニング」(八田, 1964a, p.142)と命名し、流行したものとの差異を強調する。この点について八田は、具体的に以下のように述べている。

本人のペースで走られたんではトレーニングにならないので、フル・スピードで、ハーフ・スピードで走らせる。調子を崩して息をあげさせるのである。…(中略)…自分の調子で練習しておったんでは、何分練習していてもだめだから、十分、呼吸困難にしてやろうと思ってやった。(八田, 1964a, p.143)

つまり、「逆インターバル・トレーニング」とは、八田が選手たちの練習光景を観察し、選手たちの走力が高く「本人のペースで走られたんではトレーニングにならない」との課題を見出し、選手たちを「十分、呼吸困難に」するために「トレーニング」法を改善させた結果、生成したものといえるだろう。実際には、同じ「トレーニング」の内容や効果であると考えられるが、八田が当時流行した「トレーニング」との差異を強調するのは何故だろうか。他の競技種目の指導者たちは、流行している「トレーニング」法を用いているのに対し、八田は自ら選手たちの「トレーニング」を観察し、選手強化には選手たちを「十分、呼吸困難に」する必要があると考え、この「トレーニング」法を編み出し、自らの指導実践に採用している。つまり、選手たちに「トレーニング」を課す背景や目的に違いがあるからだといえるだろう。実際に八田は、この点について「わたしらの目的が違っていた」(八田, 1964a, p.143)と述べている。また同時に、この「トレーニング」について、「わたしが発明した」(八田, 1965a, p.122)ものであると主張し、自らを「インターバル走法の元祖」(八田, 1965a, p.122)とも称している。

- 13) 八田が最初に「左右平均論」(八田, 1932, p.7)を公表したのは、1932(昭和7)年5月に刊行された講道館機関誌、雑誌『柔道』においてである。八田による「左右平均論」の生成は、

自らの野球の観戦やピアニストの動作への観察から芽生えた問題意識を源流とする(八田, 1965b, pp.23-24)。すなわち、八田は「考えてみると、人間は大体右ききであるが、なかには左ききもある。しかし、いずれも片方専門で、片手片足しか自由に使えないということは、まことに不自由なことである。両方同じように使えたら、どんなに便利であろうか、…(中略)…強味」(八田, 1965b, p.23)になるかもしれないとの仮説を立てる。以後、八田は、日常生活はもとより当時、行なっていた柔道の稽古でも「生来右ききだったから、左が自由に使えるように練習した」(八田, 1965b, p.24)という。その結果、遂に「左右平均」の「身体」の利用が柔道において有用であることを明らかにした。

- 14) また八田は、「右と左が同じようにできるようになれば、一たす一が二でなくて、四とか五くらいの実力ができるといふのだ」(八田, 1964a, p.133)とも表現している。
- 15) 八田はこうした「トレーニング」の実施理由を述べる根拠として、レスリング競技のルールでは階級制が採用され、「目方」が規定されているので、より大きな「力」を発揮するためには「スピード」を向上させる必要があること、また仮に無差別級に出場する選手で「目方」が少なかったとしても、速い「スピード」を出すことでより大きな攻撃「力」を発揮できるといふことを挙げる。また、恐ろしさを与えることの説明には、原子爆弾を例に挙げ、選手たちに指導する(八田, 1964a, p.182)。八田がこのような「力」と「スピード」を重視した背景には、以下のような物理法則に関する八田の理解があった。

mを目方、vをスピードとすれば、 $\frac{1}{2}mv^2$ で力の強さと表わすことができる。たとえば、五貫目のものが十メートルの速さでぶつかるのであれば、五貫目に十の自乗だから、五百貫。その二分の一だから、二百五十貫の力である。十貫目のものが五メートルのスピードでぶつかるのであれば百二十五貫の力だ。目方が半分でもス

ピードが倍あればその力は倍となる。

$$\begin{aligned}\frac{1}{2}(5 \times 10^2) &= \frac{1}{2}(5 \times 100) = 500 \times \frac{1}{2} = 250 \\ \frac{1}{2}(10 \times 5^2) &= \frac{1}{2}(10 \times 25) = 250 \times \frac{1}{2} = 125 \\ &\text{(八田, 1964a, p.181)}\end{aligned}$$

- 16) 八田は、この「トレーニング」を課された選手たちについて、「はじめて連れてこられ、いきなり『海に入れ』といわれて、びっくり」(八田, 1964a, p.119) し、「“そんなことはできるもんか” という表情」(八田, 1965a, p.66) であった。「ちょっととっぴだと思いうし、自分にはできないと尻込みしてい」(八田, 1965b, p.146) た選手もいたという。その上で八田は、この「トレーニング」のように「ふだんできないことや無理なこと、世間の常識からみればバカバカしいと思うこと」(八田, 1965a, p.67) を選手たちに対し意図的に課した。なぜなら、八田は「人のやらないことを、やれないことを、思いきってずばりとやるということは、レスリングの試合にとってたいせつなこと」(八田, 1964a, p.119) であると考えていたからである。
- 17) 本稿の冒頭で述べたように、専門的な知識がなく精神的な面ばかりを強調する非合理的な「根性」論に基づく指導が昨今の運動部活動における体罰や事故の原因であると考えられることを踏まえると、指導者たちは、専門的な知識を身に付けた上で、選手たちに「肉体の力と精神力」の両面の育成を意図した指導を実践していく必要があると考えられるだろう。
- 18) 例えば八田は、「日常の動作」の重要性について「マットとかフィールドの上だけの練習ではダメなので、日ごろの生活からかえなければいけない。…(中略)…スポーツには、ただ競技の際だけでなく、日常の訓練がいかに必要であるか、いまでもわたしは、つねに選手にそれを教え、かつ実行している」(八田, 1965b, p.25) と述べている。

引用参考文献

- 朝日新聞. 2013 年 2 月 23 日付, 朝刊.
朝日新聞. 2014 年 9 月 6 日付, 朝刊.
朝日新聞. 2014 年 9 月 6 日付, 朝刊.
檀一雄 (2015) “八田イズム” の勝利. 講談社編, 東京オリンピック-文学者の見た世紀の祭典. 講談社: 東京, pp.91-94.
デビットノッター・竹内洋 (2001) スポーツ・エリート・ハビトゥス. 杉本厚夫編, 体育教育を学ぶ人のために. 世界思想社: 京都, pp.4-23.
八田一朗 (1932) 左右平均論. 柔道 3(5): 7.
八田一朗 (1953) レスリング. 旺文社: 東京.
八田一朗 (1961) レスリング. 旺文社: 東京.
八田一朗 (1964a) わが道を行く: 人生を勝ち抜く八田イズム. ペースボール・マガジン社: 東京.
八田一朗 (1964b) レスリング. 旺文社: 東京.
八田一朗 (1965a) 剃るぞ!. 講談社: 東京.
八田一朗 (1965b) 勝負根性. 実業之日本社: 大阪.
八田一朗 (1966) レスリング. 旺文社: 東京.
八田一朗 (1979) 私の歩んできた道. 立花書房: 東京.
報知新聞, 1964 年 8 月 13 日付, 朝刊.
菊幸一 (2017) 暴力, 体罰, ハラスメントを克服するために. 友添秀則編, よくわかるスポーツ倫理学. ミネルヴァ書房: 京都, pp.120-121.
菊村到 (2015) やって来てよかった. 講談社編, 東京オリンピック-文学者の見た世紀の祭典. 講談社: 東京, pp.310-314.
岸野雄三 (1968) 日本のスポーツと日本人のスポーツ観. 体育の科学, 18(1): 12-15.
呉市史編纂委員会 (2002) 呉市制 100 周年記念版 呉の歴史. 呉市役所: 広島.
松田岩男 (1971) 根性の心理. 体育の科学, 21(9): 572-574.
森川貞夫 (2013) 日本スポーツ界は暴力を克服できるか. かもがわ出版: 京都, p.6.
中込四郎 (1984) スポーツにおける精神力の分析: 根性を考える. 体育の科学, 34(2): 84-88.
日本レスリング協会 80 年史編纂委員会編 (2012) 日本レスリング協会 80 年史. 日本レスリン

- グ協会：東京。
- 岡部祐介・友添秀則・春日芳美（2012）1960年代における「根性」の変容に関する一考察：東京オリンピックが果たした役割に着目して．体育学研究，57：129-142.
- 小野瀬剛志（2001）昭和初期におけるスポーツ論争：「日本のスポーツ観」批判をめぐる．スポーツ社会学研究，9：60-70.
- 坂上康博（2001）にっぽん野球の系譜学．青弓社：東京．
- 三本松正敏（2003）日本のスポーツ論再考．福岡教育大学紀要 52 第5分冊：51-64.
- 菅原禮（1976）日本のスポーツ風土の社会学的考察．新体育，46(4)：22-25.
- 竹内好（1959）講座をはじめに当って．家永三郎編，近代日本思想史講座 1 歴史的概観．筑摩書房：東京，pp.1-12.
- 上杉正幸（1982）日本人のスポーツ価値意識と道・修行の思想．体育・スポーツ社会学研究，1：39-57.
- 「早稲田大学柔道部百年史」編集委員会編（1997）早稲田大学柔道部百年史．早稲田大学柔道部・早稲田柔道クラブ：東京．
- 早稲田大学レスリング部 70 年史編集委員会（2001）早稲田大学レスリング部 70 年史．稲門レスリング倶楽部：東京．
- 山岸俊男（1979）根性主義：「おれについてこい！」の内容分析．一橋論叢，81(2)：181-197.
- 山岸俊男・市川孝一・島田幸男（1979）高度成長期の社会心理の一側面：「根性主義」試論．佐藤毅ほか編，現代の社会心理．誠信書房：東京，pp.231-249.
- 山地啓司（2015）インターバルトレーニング．中村敏雄ほか編，21 世紀スポーツ大辞典．大修館書店：東京，p.312.
- 読売新聞．1960 年 7 月 27 日付，夕刊．
- 読売新聞．1960 年 7 月 28 日付，夕刊．
- 読売新聞．2016 年 7 月 6 日付，朝刊．
- 財団法人日本レスリング協会 80 年史編纂委員会（2012）財団法人日本レスリング協会 80 年史．財団法人日本レスリング協会：東京

2019 年 4 月 9 日 受付

2019 年 11 月 12 日 受理